

〈論文題目〉

子ども中心の教育に関する哲学的探究

— デューイとフレネをもとに —

指導教授 森川 直

岡山大学大学院 教育学研究科 学校教育専攻 17-004 澤 直也

## I 研究の目的と方法

「万物をつくる者の手を離れるときすべてはよいものであるが、人間の手にうつるとすべてが悪くなる」<sup>(1)</sup> というのは子どもの発見の書『エミール』の冒頭に書かれた一文である。衝撃的な一文であるが、これは何も教育を全否定しているわけではない。それほど慎重に教育を行う必要があるという主張である。教育には様々な立場が存在しているが、そのすべてを良い教育であると認めることはできないだろう。我々は、子ども達にとって良い教育とはどんなものであるかを慎重に吟味していかなければならない。「子どもが意識的な教育の対象と見なされるようになってきた」<sup>(2)</sup> 近代以降、教育は子どもと大人のどちらに主体を置くかで揺れ動き、混沌としたものになった。まず、最初に主流になったのは、大人中心で知識の教え込みを中心とする伝統的教育であった。そして、大人社会に子どもを順応させようとするそうした教育から子どもを解放しようとして生まれたのが、児童中心主義の思想やその流れを汲む新教育であった。これらは、子どもの内側からの発達に重きを置いたことで知られている。確かに、子ども自身による内側からの発達に目を向けることは非常に重要であろう。このことについて斉藤喜博氏も「子どもは本来たくましい自主性を持ち、積極性を持ち、創造力を持っている。そういう子どもの持っている自主性や積極性や創造力を、うながして育て、拡大させてやることこそが教育である」<sup>(3)</sup> と述べている。

しかし、大正の新教育運動以降取り入れられてきた児童中心主義を始めとする子ども中心の教育が、結局は我が国に浸透しなかったのも事実である。だからといって、新教育運動の中で築き上げられた子ども中心の教育に関する理論や実践を過去の産物として、地中に埋めてしまうのは時期尚早であろう。我々は、新教育の理論が実践段階でうまく実現できなかったという可能性を考慮してみる必要がある。戦後から今日に至るまで行われてきた教育実践は、本当に新教育の思想家や実践家たちの真意を受け継いでいるのだろうか、もう一度その点を疑ってみなくてはならない。というのも、「子ども中心」という言葉は誤解を生みやすく、その上辺だけがすぐわれ教育に適用されると、過保護や放任主義の教育が横行してしまうからである。子どもの主体的な学習の重視、興味の尊重、作業教育など言葉だけがひとり歩きしてしまうような事態は避けられなければならない。

子ども中心の教育とは、いかにあるべきなのか。そもそも教師—子ども、知的学力—人間形成といった対立構造は正しいのだろうか。私は、原点に立ち返って、それらのことを改めて考え直してみる必要性を強く感じた。そこで、本論文では過去の偉人たちが構築してきた子ども中心の教育における真の姿についての全体的追究と根源的追究、つまりは哲学的探究を研究の目的とする。

尚、本論文では児童中心主義の教育をはじめ、子ども自身に固有の価値を認め子どもの内からの発達を重視する立場からの教育を「子ども中心の教育」と総称する。また、子どもは大人の対概念として用いることとする。

研究の方法としては、アメリカの教育家であり、新教育の第一人者として知られるJ. デューイ（1859-1952）とフランスの実践家でフレネ学校の創始者として知られるC. フレネ（1896-1966）の教育論を比較することで、子ども中心の教育の真にあるべき姿を模索していくことにする。デューイは、理論を中心としていた一方で、実験学校を設立するなど実践での研究も重視していた人物である。また、フレネは、実践家でありながら、いくつもの著作を書き残しているように理論家としての一面も兼ね備えている人物である。教育は、実践と理論の結合の上に初めて成り立つことができるものである。私は先ほどの研究の目的において、新教育の理論が実践に移される段階でその本質的意味が歪曲されている可能性を指摘した。その推論が正しいという前提のもと述べるならば、現在の混迷する子ども中心の教育において求められているのは、実践からも理論からも裏付けられた確かな方向性であると感じる。子ども中心の教育に関することで理論家、実践家の双方が認める指針があるとなれば、それは暗闇の中で蛇行する現在の教育にとって、一筋の光となりうるのではないだろうか。私があえて、デューイだけ、もしくはフレネだけに限定することなく、両者を引き合いに出すのはそのためである。

このことを前提に、私がデューイとフレネに注目するのは、次の4点においてである。

- 1, フレネとデューイがほぼ同じ時代に生き、共に新教育の流れを汲んだ教育家である点。
- 2, 一方は理論家、一方は実践家という異なるアプローチでの教育改革を試みた点。
- 3, 両者が宗教的に中立である点。
- 4, 彼らは時代的に、教え込みの教育と行きすぎた経験主義の両方を俯瞰的にみることができた。その中で、第3の教育のあり方を模索した点。

これらの4点を踏まえ、子ども中心の教育についてのより客観的な真理を抽出するのが本論文の狙いである。

先行研究として、新教育や児童中心主義を研究したものは多く見られる。その中でデューイの教育理論を解釈・考察した研究は数多く存在する。例えば、関勤氏は教材と教授法との関係からデューイの教育を考察し、両者の連続性を重視する必要を説いた。また、中

津川順子氏はデューイの教師論に注目し、彼の教育論において教師の役割が決して小さくないことを指摘した。一方のフレネに関しては、佐藤広和氏が1950年に起きたフレネ論争の視点からフレネ教育を考察した論文が存在する。ルソー研究者の第一人者として知られるミシェル・ローネ氏は、フレネとルソーを比較し、両者がともに生活による教育を重視したことを指摘している。また、デューイとフレネの2人を照らし合わせた研究は過去にされていない。

以上のことより、本論文ではデューイとフレネをもとにして、子ども中心の教育が本来どのような形で構想されていたのかということについて考察していき、混迷する現代教育に一つの指針を打ち立てることとする。

## II 論文構成

はじめに

### 第1章 子ども中心の教育におけるデューイとフレネ

#### 第1節 新教育とは

#### 第2節 新教育におけるデューイ

#### 第3節 新教育におけるフレネ

### 第2章 デューイの考える子ども中心の教育

#### 第1節 「もうひとつの途」

#### 第2節 経験概念の理解

#### 第3節 子どもの興味

#### 第4節 教師の役割

### 第3章 フレネの考える子ども中心の教育

#### 第1節 「別の道」

#### 第2節 仕事の学校

#### 第3節 子どもの興味

#### 第4節 教師の役割

### 第4章 子ども中心の教育における一つの指針

#### 第1節 生活による教育

#### 第2節 子どもの興味

#### 第3節 教師の役割

#### 第4節 教育における第3の「みち」

おわりに

### Ⅲ 論文内容

#### 【第1章】

「研究の目的と方法」においてに述べた通り、デューイとフレネは新教育の流れを汲む教育家である。そこで本章の冒頭では、子ども中心の教育における新教育の位置づけと新教育の特徴について考察している。新教育運動は、近代の初めから主張されてきた子ども中心の教育の重要性を世界に訴えかけ、それを再発見させたものである。この運動は、世界中で均一的な展開を見せていたかという点、そうではなかった。平野正久氏が、新教育には「国際的に共通な傾向性が認められるが、それと同時に、それぞれの国の精神文化史的な伝統や教育史的な課題状況の違いに応じて多彩な民族的独自性が見られる点も注目値する」<sup>(4)</sup>と指摘しているように、世界各地でそれぞれの特色を持った新教育運動が展開されたのである。国際的に共通な点としては、従来の注入主義的な学校教育に対する批判、子どもの個性と自発性の尊重、知識中心主義に対する感情的側面の重視、作業教育の重視などの特色が挙げられる。

続く第2節では、アメリカの新教育の特色と、デューイの生い立ちと併行して新教育の中での彼の位置づけについて述べている。デューイの新教育運動における位置づけは、論じる人によって異なってくるが、彼が新教育の問題点について指摘する時、新教育を踏み倒すためではなくその理論をより発展させるためであった点、彼が著書において旧教育と対峙させて論を展開している点から、本論文ではデューイを新教育運動の中に位置づけ、その考えをより洗練していった人物として捉えることにした。いずれにしても、彼が新教育に対して大きな影響を与えたことは疑いの余地がないことである。

第3節では、フランスの新教育の特色と、フレネの生い立ちと併行して新教育における彼の位置づけについて考察している。フレネ教育は、その独特の実践から独自性ばかりが強調して見られる傾向にある。しかし、伝統的教育に断固として反対の姿勢を貫いた点や労働者への教育解放のための万人への教育を志向した点では、フランスの新教育の特徴を根底にしっかりと受け継いでいるといえることができる。さらに、フレネの死後、フランスの教育界では、半世紀も前から彼が主張してきた教育論が大胆に取り入れられ、学校教育は大きな変化をみせた。子ども中心の教育をどの国よりも早くに構想し始め、5世紀にも渡りそれを発展させてきたフランスの教育が、その指針としてフレネの教育方法を選んだという事実は、彼が子ども中心の教育に関して示してきた理論と実践の重要性を示唆していると言えよう。

#### 【第2章】

本章では、デューイの主張する子ども中心の教育がどんなものであったかについて考察している。

最初の第1節では、デューイが教え込みや極端な経験主義とは一線を画していることを明らかにし、続く第2節では、彼の教育論の中核をなしている経験概念についての考察を試みた。「一オンスの経験の方が一トンの理論に勝るのは、どんな理論でも、経験においてはじめて、生きた vital、検証可能な verifiable 意味を持つからにはかならない。」<sup>(5)</sup>と経験の重要性を強調するデューイは、すべての学科においても経験的な要素を基礎におかなければならないと考えた。デューイの考える経験とは、主体が環境に働きかけることと、その反作用として環境から主体が被ることであり、彼はこの2つの側面の結合の重要性を説いた。教育上、重要なのはこのような経験の改造であり、それこそが教育の目的である。また、ものを知るとは観念 idea を獲得することであると考えたデューイは、この観念は経験なしでは獲得し得ないと主張し、経験を通してこそ、人は真にものを知ることができるのだと考えた。だからこそ、彼の教育では経験に重きが置かれるのである。

デューイは「活動 activities」の中でも、とりわけ「仕事 occupation, work」と呼ばれるものを重視した。仕事とは、「子どもが行う一種の活動 activity であって、それが社会生活 social life においていとなまれる或る形態の作業を再現 reproduce したり、ないし、それと対応して run parallel to おこなわれたりするもの」<sup>(6)</sup>である。デューイの実験学校においては、工作室で行われる活動や、料理、裁縫、または織物作業によって代表されているものが、仕事に当たる。このような仕事は、彼の経験概念をそのまま反映したものであると言える。

デューイの教育では、子どもの興味を出発点として学習が行われる。興味 interest という言葉の語源は、「間にあるもの」、つまりもともと離れている2つのものを結びつけるものであることを暗示する。学習において、子どもの現在の能力が最初の段階であり、到達すべき目標が最終段階であるが、この「両者の間には媒介—すなわち中間的情况 intermediate —がある」<sup>(7)</sup>とデューイは考えた。この中間的情况とは、為すべき行為、克服すべき困難、用いるべき教材を指すのだが、本来、その中間の行為が辿り着きたい結果に自分を導く手段となるからこそ、子どもはそれに興味をいだくのである。だから、自分が今行っていることや今向かっている教材が、今現在の自分、それから目指すべき目標にどれほど深く関係あるのかを知ったとき、子どもはより強い興味を持つであろうと考えることができる。また、興味とは「力が伸びていくことのしるしであり、きざしである。それらは、能力のあけぼのを示すものである」<sup>(8)</sup>と同時に、「子どもがいま入ろうとしている新しい発達段階を予告している」<sup>(9)</sup>ものである。すなわち、興味は子どもの現在と未来を映し出す鏡のようなものであると言えよう。だから、興味は、子ども達の未来の成長の方向にあり、活動と統一されていなければならない。以上が第3節の内容である。

続く第4節では、教師の視点からデューイの教育論を掘り下げ、教師の役割について述べている。「教師は、子どもに一定の諸観念を押しつけたり、一定の習慣を形づくるために学校にいるのではなく、共同社会の一員として、子どもに及ぼしめるもろもろの影響

力を取捨選択し、子どもがこれらの影響力に適切に反応できるように援助するために、学校に存在するのである。」<sup>(10)</sup> 教師の役割について、このように述べるデューイは教師の役割を限定しながらも、教師は高度な技術や知識を備えた専門家でなければならないとした。また、子どもの興味の観点から考察すると、子どもの興味が観察し、そこに秘められている現在の能力とそれが何に向かって進行しているのかを考慮し、成長へと活用していくという教師の役割が示される。子どもの興味がいかに良いものへと導いていけるかは、教師の力量次第である。よって、教師には最大限の能力と責任が要求されることにもなる。さらに指導の観点から考察すると、新たな教師の役割が明確になる。デューイは、「統制 control」・「指導 direction」・「補導 guidance」のうち「指導」こそが最も望ましい教師の働きかけであると主張した。この指導とは、常に子どもの本能や衝動を原動力とし、目指す目的に彼の活動を集中させると同時に、彼の次の行動がどのようなものに発展するかを考え、適切な刺激を与えることによる再指導 re-direction であると定義することができる。

### 【第3章】

本章では、フレネが思い描き実践した子ども中心の教育がどんなものであったかについて探究している。

第1節では、フレネがデューイと同じように教え込みや極端な経験主義を批判していることを明らかにし、第2節ではフレネ教育において最も重要な概念である「仕事」について論究した。「明日の学校は、仕事の学校となるであろう」<sup>(11)</sup>と述べるフレネは、子どもに各々の社会的役割を自覚させ、身体と精神の調和をもたらす仕事こそが、学校教育で重んじられなければならないとした。この主張の前提となっているのは、仕事こそが子どもの本質的活動であるというフレネの考えである。フレネは仕事と併行して子どもの「遊び」の重要性も論じ、学校で行われるいかなる仕事もこの遊びの性質を持ったものでなければならぬと述べている。彼は、著作の中でこの遊びの要素を含んだ仕事を「仕事＝遊び」と表現している。これは、目的を持っており有用性を生む活動ではあるが、その活動の中に目的が内在しているもので、「遊びとしての仕事」と解釈することができる。

仕事による教育は幼児期から行われ、小学校に入ってから本格化する。最初は、単純な栽培、うさぎやにわとりの飼育など最も子ども達の関心が強い身の回りの自然から始められ、徐々に高度なものへと移っていくことになる。この内、知的な調査を中心とする仕事（学習）は教室で、作業を伴うような仕事は学校内に設けられた8種類のアトリエで行われる。「仕事にはすべてがある」<sup>(12)</sup>とフレネは言う。壁をつくるにしても、家を建てるにしても、それらの仕事は単に肉体的、機械的なのではなく、知識や哲学的思考も要求されることになる。だから、仕事の教育と算数や地理や歴史などの教科教育が併行して行われることにより、「今日、抽象的で厄介なものとなっているこれらの勉強が、具体的目標を持つこととなり、この目標のために、勉強が切実に求められることになるため、興味深い

ものとなる」<sup>(13)</sup>のである。フレネの構想する学校において、仕事は学習の出発点でもあり、同時に終着点でもあるのだ。仕事を通じて生まれた疑問や意欲が知的な学習を促進し意味づけ、その知によって仕事はよりいっそう充実したものになるのである。

フレネ教育では、いかなる仕事も、子どもの内なる興味からなされるものでなければ、それは外から与えられる学習であり、「仕事＝遊び」にはなり得ない。フレネが子どもの興味について語る時、それは常に「興味の複合」(complexes d'interet)という概念と関連づけて説明される。第3節では、この興味の複合という概念を明らかにすると同時に、それが学習(仕事)とどのように関連づけられるのかについて述べている。興味の複合というのは、ドクロリー(1871-1932)が唱えた「興味の中心」を受け継いで、発展させたものである。移ろいやすい子どもの興味を固定して考えるやり方に疑問を抱いたフレネは、興味の中心論に基づく教育を「ごく限られた商品の数で自分の営業活動を限定してかかる商店のようなものである」<sup>(14)</sup>と皮肉っている。興味の複合(complexes d'interet)の complexe は英語の complex と同じく「複雑な、複合した」という意味を持っているが、ここでは複数のものが合わさるという意味で使われていると考えられる。フレネ研究者の佐藤広和氏は、フレネのいう興味の複合には2つの側面があると指摘している。それは、「第一には個人の興味の追求の仕方における複合であり、第二には学級内のひとりひとりの子どもの異なる興味が複合していくという意味」<sup>(15)</sup>である。

実際の教育での興味の複合は、自由テキストを中心としたフレネ技術を通して実現されることになる。子ども達は、ひとつのテキストから派生した様々なテーマの中から、自分の学習したいものを選択でき、個人やチームで学習を進行させていく。子ども達は、徐々に高度な内容のものへと研究を進めていくことができるし、必要ならば他のテーマへ移っていくこともできる。これが、先程の個人における興味の複合である。そして、その研究結果はクラスへとフィードバックされ、共有化される。これが、学級内での興味の複合である。フレネの説く「興味の複合論」に基づく教育は、子ども一人ひとりにスポットライトを当てそれぞれの興味を原動力とした、まさに主体的な学習を促進するものであると言える。

フレネ教育に限らず、子ども中心の教育で最も問題視されるのが教師の役割についてである。実際、1950年以降にフランスで起こったフレネ批判論争の際も、この問題が最大の論点になったようである。しかし、実際には「ある種の新しい教育の理論家とは反対に、われわれは、子供たちがひたすら自分たちの成功や個人的な気まぐれで行動するのを放置しておくべきだとは考えていない」<sup>(16)</sup>と述べるフレネは、教師の役割を軽視していたわけではないようだ。子どもの学習がより優れたものになるのであれば教師は最大限に努力し、反対に介入することで不具合が生じる場面では教師は助力する必要性を持たないのである。しかし、大抵の場合は前者のように教師の助力が求められるので、「教師には仕事に事欠くことはない。旧式の学校の教師と違って、彼はめったに座ることがない」<sup>(17)</sup>。教師

の具体的な役割としては、指示する、手伝う、批評する、説明する、注意するなどの子ども達に対しての直接的な働きかけや、環境を設定する、学習の年間計画を立てる、地域と学校の結合を強める、教材や教育技術の開発など陰で行うものも挙げることができる。子ども達の個々の要求にあった助力をしていかなければならない教師には、幅広い知識や高度な技術が要求されることになる。

#### 【第4章】

本章では、第1章から第3章において掘りおこしてきたデューイとフレネの教育理論・教育実践をもとに、子ども中心の教育の哲学的考察を試みている。デューイとフレネは子ども中心の教育に、いかなる指針を与えてくれるのであろうか。

既述のとおり、デューイとフレネのそれぞれの教育における中心概念は「経験による教育」と「仕事の学校」であった。言葉の上では、共通性がないように見える両者は、根本的なある一点で密接な関連を持っている。それは、「生活」である。

デューイは「言葉としてのこの経験を、教育上は「生活 life」と言い、倫理学上は「行為 conduct」と呼び、心理学上は「行動 behavior」と言い、また日常実践的には既述の通り「処理 transaction」や「操作 operation」という場合がある」<sup>(18)</sup>と清水秀芳氏が指摘していることから考えると、デューイが経験について述べているとき、それは生活について述べているのと同じであるということになる。

一方のフレネに関しても、同様のことが言える。彼の使う仕事 *travail* という語が指し示す範囲は非常に広く、子どもの活動の大部分を締めているといえる。学校において、机に座って本を読むのも仕事であり、のこぎりで板を切断するのも、学校共同組合の会議に参加するのも仕事である（ただし、幼年期の仕事は遊びの要素をより多く含むが）。よって、フレネ教育においては、仕事≡生活という等式が成り立つのである。

以上のことが理解されると、両者が教育において生活との関連性を一番に考えていたことが明確となる。デューイの「生活することが第一である *living primarily*。学習は生活することをとおして、また生活することとの関連においておこなわれる」<sup>(19)</sup>べきであるという主張や、フレネの「生活こそ欠損のない、活力のある諸個人、教育や文化、科学、芸術へ向かう基礎的活動をもった、諸個人を作り出せるに適したものだ」<sup>(20)</sup>という主張を引き合いに出すまでもなく、2人は、経験と仕事との関連で生活を中心においた教育の重要性を十分に説明している。これに加えて、学校で行われるべきは単に遊戯的な活動に止まるべきではなく、小型の社会 *miniature community*、胎芽的な社会 *an embryonic society* での理想的な社会生活、共同体生活であることも理解されなくてはならない。このような生活を中心とした教育は、旧教育では孤立していた学校と社会、知識と行動などの側面を結合する機能を持っている。我々は、彼らが提唱したのが「生活を用いた教育」ではなく「生活を中心においた教育」であったことに、今一度注目する必要があるだろう。

では、各章の第3節で取り上げてきた子どもの興味についての、2人の意見はどうか。デューイとフレネの意見が一致しているのは、子どもの興味が学習の出発点である点、子ども一人ひとりの興味に焦点を当てた点、有用性と結びついた興味に否定的である点においてである。

このような興味を持った子どもに対して教師はどういった役割を担うべきなのであろうか。デューイとフレネには、一方は教師の役割を主に「指導direction」という観点から、他方は主に「助力」という観点から考察しているという違いがある。しかし、その言葉の中身を吟味すると彼らの主張が根本的な点で一致していることに気付かされる。デューイは「全く外的な指導は不可能だ」<sup>(21)</sup>と主張し、指導はあくまで「再指導」でなければならないとしていた。まず、第一に生まれた時から始まっている子どもの動的な活動が存在し、教師はそれを前提とした上で子どもをあるべき姿へと導いてやらなければならないというのが、デューイの意図であった。さらに、彼は著作において、教師は「援助するために、学校に存在するのである」<sup>(22)</sup>という記述を残している。これらのことより、デューイが考えた学校における教師の主な役割とは、「援助の性質を持った指導」であるということができよう。フレネの「助力」についても吟味が必要である。我々は、彼のいう助力や援助が、消極的な意味で用いられているのではなく、むしろ積極的な意味合いを強く持つという点に注意しなければならない。フレネが教師の役割において「指導」という言葉を用いずあえて「助力」としたのは、彼が子どもの内から生じる衝動や興味を尊重しようとしたからであって、決して教師の役割を過小評価するためではなかったのである。これらを踏まえると、彼らに共通しているのは、子どもの自主的・主体的な学びを「支援する」という姿勢であるという事が分かる。まず教育の大前提として子どもの活動があり、教師はその活動をより良いものにするために最大限の働きかけを行わなければならないのである。

デューイとフレネの教育的立場を考察すると、両者が共に経験か教え込みかというにらみ合いとは別の土俵で理想的な教育のあり方を模索しようとしていた、ということが明確となる。彼らはそれぞれ「もうひとつの途」「別の道」という表現を用い、旧教育でも偏った児童中心主義でもない第3の「みち」を構想したのであった。その「みち」とは、本レジュメでこれまで述べてきた内容そのものであるということが出来る。では、私が論文の冒頭で行った「そもそも教師－子ども、知的学力－人間形成といった対立構造は正しいのだろうか」という問題提起にデューイとフレネはどう答えてくれるのであろうか。

教師の働きかけは、子どもの自主性や主体性を下から支え、正しい方向へと導いてやるものである。そうした中での教師と子どもの関係は、どちらか一方を立てれば他方が立たないといった二律背反的なものではないということは、これまで述べてきたことから伺える。さらに彼らは、知的学力と人間形成においても、同様な見解を示している。デュー

イやフレネが、教育における知識の獲得を軽視していない事は論文の中で繰り返し述べてきたことである。複雑化する社会で生きていくためには、豊富な知識が必要であるのは当然のことである。問題とされなければならないのは、知識の獲得の仕方であり、彼らは生活との関連において獲得される知こそが本当の知識であると考えたのであった。教育上の様々な対立は、もともと生活から分かれたものであり、根底に生活を置いた教育によって結合されなければならないのである。

以上のことより、第3の「みち」の根源的な真理は、生活を中心とした教育によって、諸々の教育的要素を孤立させることなく結合させることであるという結論に辿りつくことができる。「生活することが第一である」<sup>(23)</sup>。子どもは生活することの結果として、知識や技能や人間性など様々な能力を身に付けていく。ただし、その結果は、教師によって予測され、計画され、意図したものへと導かれるのである。

デューイは、著作『教育の混乱をぬけだす道The Way Out of Educational Confusion』の中で、真の子ども中心の教育は誤って実践に移されやすいことを指摘し、それらの混乱は「伝統に追従しようとするくわだてによるものであり、それでいてなおまったくあたらしい材料と関心をそれにみちびきいれようとするところにある。それは古いものに新しいものをかさねるくわだてである。」<sup>(24)</sup>と述べている。これは、伝統的教育の土台の上にくら子ども中心の教育における技術や方法を重ねても、かえって混乱を招くだけだという主張である。我々は、この主張をしっかりと心に刻んでおく必要がある。現在の日本の教育に求められているのは、教育の根本的な改革であろう。

私が本論文で残した課題は、さらに子ども中心の教育に関するより多くの事象に当たり、その中で根源的追究と全体的統一を行うことである。加えて、本論文では学習の出発点についての考察が中心になり、学習の到達点、つまり目的についての考察が不足している。教師が、子どもの活動をどんな目的へ向けて導いていけば良いのかという点については課題を残したと言えよう。さらに、デューイやフレネが意図した教育が、現代の教育で実践可能なのかという点についても慎重な吟味が必要であると感じる。

- 
- (1) ルソー著、今野一雄訳『エミール 上』岩波書店、1962年、23頁。
  - (2) 小林登、宮澤康人著『新しい子ども学3 子どもとは』海鳴社、1986年、98頁。
  - (3) 斉藤喜博著『斉藤喜博全集8』国土社、1970年、237頁。
  - (4) 長尾十三二著『新教育運動の生起と展開』明治図書、1988年、54頁。
  - (5) John Dewey “School and Society” in John Dewey the middle works 1899-1924 volume 1, Southern Illinois University Press, 1976,p.151.  
J.デューイ著、毛利陽太郎訳『学校と社会』明治図書、1985年、230頁。

- (6) *ibid.*,p.92.  
同上書、159頁。
- (7) John Dewey “Democracy and Education” Southern Illinois University Press,1916,p.133.  
J.デューイ著、松野安男訳『民主主義と教育(上)』岩波書店、1975年、205頁。
- (8) J.デューイ著、遠藤昭彦・佐藤三郎訳『実験学校の理論』明治図書、1977年、22頁。
- (9) 同上書、22頁。
- (10) 同上書、15頁。
- (11) C.フレネ著、宮ヶ谷徳三訳『手工業を学校へ』黎明書房、1980年、20頁。
- (12) 同上書、205頁。
- (13) 同上書、111頁。
- (14) フレネ著、宮ヶ谷徳三訳『手工業を学校へ』黎明書房、1980年、117頁。
- (15) 佐藤宏和著『フレネ教育 生活表現と個性化教育』青木書店、1995年、79頁。
- (16) C.フレネ著、宮ヶ谷徳三訳『手工業を学校へ』黎明書房、1980年、106頁。
- (17) 同上書、137頁。
- (18) 清水秀芳著『デューイの教育哲学新研究－民主化と創造の教育原理』学芸図書、1971年、33頁。
- (19) John Dewey “School and Society” in John Dewey the middle works 1899-1924 volume 1, Southern Illinois University Press, 1976,p.24.  
J.デューイ著、毛利陽太郎訳『学校と社会』明治図書、1985年、52頁。
- (20) C.フレネ著、宮ヶ谷徳三訳『手工業を学校へ』黎明書房、1980年、87頁。
- (21) John Dewey “Democracy and Education” Southern Illinois University Press,1916,p.30.  
J.デューイ著、松野安男訳『民主主義と教育(上)』岩波書店、1975年、49頁。
- (22) J.デューイ著、遠藤昭彦・佐藤三郎訳『実験学校の理論』明治図書、1977年、15頁。
- (23) John Dewey “School and Society” in John Dewey the middle works 1899-1924 volume 1, Southern Illinois University Press, 1976,p.24.  
J.デューイ著、毛利陽太郎訳『学校と社会』明治図書、1985年、51頁。
- (24) J.デューイ著、杉浦宏訳『教育における興味と努力』明治図書、1972年、114頁。

#### IV 参考・引用文献

- ・ J.デューイ著、松野安男訳『民主主義と教育』岩波書店、1975年。
- ・ John Dewey “Democracy and Education” Southern Illinois University Press,1916.
- ・ J.デューイ著、杉浦宏訳『教育における興味と努力』明治図書、1972年。
- ・ J.デューイ著、毛利陽太郎訳『学校と社会』明治図書、1985年。
- ・ John Dewey “School and Society” in John Dewey the middle works 1899-1924 volume 1, Southern Illinois University Press, 1976.
- ・ J.デューイ著、遠藤昭彦・佐藤三郎訳『実験学校の理論』明治図書、1977年。
- ・ 清水秀芳著『デューイの教育哲学新研究－民主化と創造の教育原理』学芸図書、1971年。
- ・ 森田尚人著『デューイ教育思想の形成』新曜社、1986年。
- ・ 田浦武雄著『デューイとその時代』玉川大学出版部、1984年。
- ・ C.フレネ著、宮ヶ谷徳三訳『手工業を学校へ』黎明書房、1980年。
- ・ C.フレネ著、宮ヶ谷徳三訳『仕事の教育』明治図書、1986年。
- ・ E.フレネ著、名和道子訳『フレネ教育の誕生』現代書館、1985年。
- ・ 佐藤広和著『フレネ教育 生活表現と個性化教育』青木書店、1995年。
- ・ ドクロリー著、斎藤佐和訳『世界教育学選集 85 ドクロリー・メソッド』明治図書、1977年。
- ・ 長尾十三二著『新教育運動の生起と展開』明治図書、1988年。
- ・ 長尾十三二著『新教育運動の理論』明治図書、1988年。
- ・ 長尾十三二著『新教育運動の歴史的考察』明治図書、1988年。
- ・ 岩崎次男編『西洋教育史』明治図書、1987年。
- ・ ルソー著、今野一雄訳『エミール（上）（中）（下）』岩波書店、1962年。
- ・ リット著、石原鉄雄訳『教育の根本問題－指導か放任かー』明治図書、1971年。
- ・ エレン・ケイ著、原田実訳『児童の世紀』福村書店、1952年。
- ・ 高田清「援助と指導～「指導」と「管理」概念の検討」『福岡教育大学紀要』第43号、第4分冊、1994年。
- ・ 細戸一佳「道徳教育における子どもの主体性と教師の指導性について－コールバーグの道徳教育を手がかりに」『児童学研究』通号6号、2004年。
- ・ 斉藤喜博著『斉藤喜博全集 8』国土社、1970年。
- ・ 小林登、原ひろ子、宮澤康人著『新しい子ども学 3 子どもとは』海鳴社、1986年。
- ・ 金子茂、三笠乙彦編『教育名著の愉しみ』時事通信社、1991年。
- ・ クラフキー著、森川直訳『ペスタロッチーのシュタンツだより－クラフキーの解

積付一』東信堂、1997年。

- 無藤隆著『子どもの発達と教育8 自ら学ぶ子を育てる』金子書房、1998年。
- 中津川順子「DEWEYの教師論」『福岡大学紀要』通号11号、2002年。
- 関勤著「デューイの教育理論における教材と教授法との統一」『茨城大学教育学部紀要』通号33号、1983年。
- 佐藤広和著「フレネに関する論争」『三重大学教育学研究紀要』第43号教育科学、1992年。